

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	シモーヌ・ド・ボーヴォワール『娘時代』の登場人物について : ピエール・クレローとリリ・マビユを中心として
Author(s)	伊ヶ崎, 泰枝
Citation	フランス文学 , 26 : 61 - 71
Issue Date	2007-06-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00041084
Right	
Relation	



シモーヌ・ド・ボーヴォワール『娘時代』の登場人物について —ピエール・クレローとリリ・マビユを中心として—

伊ヶ崎 泰 枝

序論

回想録の語り、すなわち出版された本の中の「公式の」語りは、例えば、サルトル・ボーヴォワールの世界的に有名なカップルのイメージや、この二人の周囲の仲間の結束の堅い結び付きのイメージを提供している。シモーヌ・ド・ボーヴォワールは、回想録第2巻『女ざかり』の序文中で「省略することには同意したが、嘘をつくことには同意しなかった」¹⁾と述べており、また、同回想録第3巻『或る戦後』の中でも「繰り返すが、故意に事実をごまかすことは一度もなかった」²⁾と断言している。このように、フィリップ・ルジュンヌが『自伝契約』の中で述べた「読書契約」を読者に提案することで、ボーヴォワールの自伝空間は、エクリチュールによる誠実な自己の探究の様相を一見保っている。

しかしながら、これらの回想録の出版の数十年後、ボーヴォワールがその中で描いたエレヌ・ド・ボーヴォワールやビアンカ・ランブラン、アンリエット・ニザン、モーリス・ド・ガンディヤックといった人々の証言の出版が相次いだ。彼らの証言は、ボーヴォワールの回想録の楽観的な語りを、時に肯定し、しかし時に疑いを差し挟んでいる。また、ボーヴォワールの死後に出版された数多くの書簡や日記からも、彼女が多くの重要な出来事を省略したことは明らかである。したがって、この回想録の語りは、作者の厳しい自己検閲を受けながら成立したと考えざるを得ない。

『嘔吐』の主人公ロカントンが「生きるか、語るかを選ばなければならない」といみじくも述べているように、実際、書かれたものと現実の間には距離が存在する。フランソワーズ・レティフは自伝の語りの曖昧な性質を次のように説明している。

L'autobiographie est un genre ambigu par définition parce que, plus encore qu'un autre, il repose sur l'illusion de la coïncidence entre le Je réel et le Je du récit — coïncidence impossible ne serait-ce que parce que l'on passe d'un univers (celui de la réalité) à un autre (celui de l'énonciation de la réalité).³⁾

したがって、現実の言表行為の世界に位置する自伝の語りにおいては、事実の表

現方法の選択を余儀なくされる。例えば、ポーヴォワールは、いくつかの出来事を削除したことを認めているが、これらの省略にもかかわらず、それぞれの登場人物を首尾一貫した形で描写するために、一種の演出が行われたのではないかと我々は推測する。本稿では回想録第1巻『娘時代』をとりあげ、ピエール・クレロー、リリ・マビユといった登場人物の演出の分析を通して、作者が事実を自伝空間に置き換える時に何が起きるのかを見ていきたい。

1. 『娘時代』の小説的統一性

まず、回想録第1巻『娘時代』の構成について確認しよう。『娘時代』の読書契約はエピテクスト、すなわちテクスト外の書評依頼状«*prière d'insérer*»の中に見られる。

En écrivant ces mémoires, j'ai soigneusement respecté la vérité et en ce qui me concerne je n'en ai rien omis.⁴⁾

また、『娘時代』には、第2巻以降にみられる脚注もなく、語り手（レオ・シュピッターの用語による *le je-narrant*）は、ヒロイン（*le je-narré*）の物語の進行にほとんど介入しない。ポーヴォワール自身は、同回想録第4巻『決算の時』の中で、幼少期から二十歳にいたるヒロインの年齢に関連してこの小説的統一性を説明している。

A travers mon enfance et ma jeunesse ma vie avait un sens clair : l'âge adulte en était le but et la raison. Vivre, à vingt ans, ce n'est pas se préparer à en avoir quarante. Tandis que, pour mon entourage et pour moi, mon devoir d'enfant et d'adolescente consistait à façonner la femme que je serais demain. (C'est pourquoi les *Mémoires d'une jeune fille rangée* ont une unité romanesque qui manque aux volumes suivants. Comme dans les romans d'apprentissage, du début à la fin le temps coule avec rigueur.) Je sentais alors mon existence comme une ascension.⁵⁾

したがって、『娘時代』の語りは、二十歳のヒロインにとって重要な出来事である「サルトルとの出会い」、および「彼女の獲得する自由の代価としてのザザの死」という最終部に向けて上昇的で弁証法的である。語りのこのような性質を踏まえた上で、最終部の重要な二つのテーマをめぐって副次的作中人物が物語の進行にいか

組み込まれているのかを見ていこう。

2. ピエール・クレロー（モーリス・ド・ガンディヤック）

『娘時代』のヒロインがソルボンヌ大学の学生になった時、サルトルとの運命的な出会いの前に彼女は何人かの学生と知り合いになる。ミシェル・リースマン（ミシェル・ポントレリ）、ジャン・マレ（ジャン・ミケル）、ピエール・クレロー（モーリス・ド・ガンディヤック）、ジャン・プラデル（モーリス・メルロー＝ポンティエー）といった人物が登場する。なかでも、ヒロインはピエール・クレロー（モーリス・ド・ガンディヤック）とジャン・プラデル（モーリス・メルロー＝ポンティエー）の二人に妹と親友のザザを紹介し、親しく交際する。第3部の終わりの部分で、語り手はピエール・クレローについての最初の印象を次のように語っている。

Il s'appelait Pierre Clairaut et sympathisait avec *L'Action française* ; petit, noiraud, il ressemblait à un grillon. Il devait se présenter l'année suivante à l'agrégation de philosophie, et nous allions donc nous trouver condisciples. Comme il avait l'air dur, hautain, et sûr de soi, je me promis qu'à la rentrée j'essaierais de découvrir ce que cachait sa carapace.⁶⁾

トマス学派でシャルル・モーラスを信奉するこのカトリック学生は、しばしば予期せぬやりかたで主人公の前にあらわれる。「スピノザに関する論文を書きなさい、人生にはそれより他にない。結婚して論文を書く以外には」⁷⁾という助言でもって、彼女の従兄弟ジャックへの劇的で感傷的な思索を中断する。また、ある時は片手に本を持って近づいてきて尋問するような調子で「あなたはアリストテレスの神が快楽を感じるだろうというプロシャールの意見についてどう思いますか」⁸⁾と尋ねる。このような場違いな出現と時宜を得ない言動でもって、ピエール・クレローは度々ヒロインを困惑させる。学術的な言葉を繰り返す様子は、『失われた時を求めて』の中の作中人物アルベール・ブロックを思わせ、『娘時代』の語りがこのピエール・クレローという人物を戯画化していることがわかる。

さて、作者がこの作品でモーリス・ド・ガンディヤックに与えたクレロー「Clairaut」という名が、「秘密をいいふらす」«claironner partout le secret»という表現を連想させるとすると、ヒロインは彼と「奇妙な友情」を結んだと言わねばならない。なぜなら、彼等二人はそれぞれの恋愛の打ち明け相手となるからである。ヒロインは、婚約者ジャックへの失望を彼に打ち明ける。他方、クレローはヒロインに婚約者との、彼の言うところの「肉体の悲劇的な宗主権」という「つらい体験」⁹⁾

を告白し、結婚や女性についてマニアックな執念でもって屁理屈をこねまわす。彼は、彼女に婚約者とのいざこざを語った短い小説を見せるが、教養ある、頭がよいといわれているこの青年の凡庸でつまらない文章はヒロインを驚かせる。このように、ヒロインの感傷的な恋愛の悩みと、喜劇的に誇張されたこの高等師範学校生の心痛は対をなしている。重重しく、しかし滑稽な助言者をヒロインに与えることで、語り手は二十歳のヒロインの経験に対して距離をおいていることがわかる。

結局のところ、高等師範学校生であるピエール・クレローは、その知性をひけらかすだけにますます物語の中で笑い者となっているのである。ヒロインの妹プーペットを口説こうとする際の彼の不器用な態度は『娘時代』の中のもっとも滑稽な場面の一つである。

Sans cesse il s'inventait des défaites qui le précipitaient dans le ressentiment. De temps en temps, il envoyait à ma sœur un pneumatique où il s'excusait d'avoir été de mauvaise humeur. Il promettait de devenir un joyeux compagnon, il allait désormais s'appliquer à cultiver sa spontanéité ; à la prochaine rencontre, son exubérance grinçante nous glaçait et de nouveau son visage se crispait de dépit.¹⁰⁾

この恨みと失敗の滑稽な場面が彼の『娘時代』の中での最後の登場場面である。ヒロインと一緒に準備していたにもかかわらず、ピエール・クレローの大学教授資格試験の結果は語りの中で言及されない。彼の存在はサルトルの登場によってかき消されてしまう。

ところで、ピエール・クレローのモデルであり、後にソルボンヌ大学の哲学史の教授となったモーリス・ド・ガンディヤックは、自身の自伝のなかで、彼等の青春時代と友情について違った見解を示している。

Ces mois d'apparente insouciance revivent dans les Carnets de Zaza de façon plus objective que dans les *Mémoires* de Simone où sont aplatis, et comme réduits à deux dimensions, plusieurs des personnages que, par discrétion, elle y présente sous des noms d'emprunt. Je ne me reconnâtrai guère, en 1938, en Clairon [*sic*], le «petit homme sec et noir» qui «ressemble à un grillon». Qu'il apparaisse pourtant comme confident, et même conseiller, confirme le témoignage de mon journal et mes souvenirs de ce qu'elle appelle, dans la dédicace de mon exemplaire, notre «vieille amitié».¹¹⁾

また、エリアーヌ・ルカルム=タボーヌは、『娘時代』の中のヒロインの長い孤独の後のサルトルの登場を«prince charmant»の登場に例えているが、¹²⁾ ガンディヤックはこの部分に対しても異議を唱えている。サルトルの伝記作家アニー・コーエン=ソラルに、サルトルの登場は『娘時代』に書かれているような劇的なものではなく、もっと理性的で平凡な出会いであったと証言している。

Cependant, un de leurs camarades de cette année-là, Maurice de Gandillac, donne une version un peu différente de ces premiers moments : «Ce ne fut pas du tout, nous dira-t-il, dans le genre “Enfin Sartre vint” comme elle se plaît à le raconter dans ses mémoires [...]. Pas de «coup de foudre» donc, semble-t-il, selon Gandillac, mais un rapprochement plus lent, plus raisonné, et peut-être plus banal qu'on ne l'imagine.¹³⁾

さらに、ボーヴォワール自身も、何人かの実在の人物を回想録の中で単純化していることを認めている。ガンディヤックにあてたシモーヌ・ド・ボーヴォワールの手紙を引用しよう。

Cher ami, merci de votre lettre et d'avoir pris avec tant de bonne humeur les pages qui vous concernent. Certainement mes rapports avec vous ont été plus nuancés que je ne le dis : avec tous les gens dont je parle d'ailleurs — et aussi avec moi-même. La plus grande sincérité ne peut aller sans des simplifications. Et puis il y a une évidente injustice dans des «Mémoires» et d'autres me l'ont reprochée moins gentiment que vous : même si on se condamne en condamnant les autres, la sévérité à l'égard de soi est désarmée du fait même qu'on est celui qui l'exerce.¹⁴⁾

このように、この手紙を通して、回想録の中では、実在の人物の単純化が重要な手段の一つであるとボーヴォワールが考えていることがわかる。平凡で逆説的な知性の象徴であるピエール・クレローは、エルボーやプラデルといった他の作中人物同様、真の天才であるサルトルの登場の前座をつとめた形となり、したがってここに一種の創作的行為がなされたと考えることができよう。すなわち、ガンディヤックという実在の人物から、作者はその機能が読み取りやすい典型的な副次的登場人物、フィリップ・アモンの用語による«personnage-type»を作り出したと言えよう。

3. リリ・マビユ（マリー＝テレーズ・ラコワン）

次に、もう一つの重要な出来事である「ザザの死」をめぐる、ラコワン家、すなわち作中でのマビユ家の人々と、長女リリ・マビユの果たす役割について考察したい。とりわけポーヴォワールが与えたマビユという仮名は古くからの貴族マビユ・ド・ポンシュヴィル家を連想させたり、また、19世紀にシャンゼリゼ通りにあった«Bal Mabille»をも思わせたりする非常にパリの的な名前である。まず最初に、ポーヴォワールは親友ザザの悲劇的な死を、彼女の属する階級による殺人であるとみなしていることに言及したい。

Ma famille m'a inspiré, à partir de mes seize ans, un désir d'évasion, des colères, des rancunes ; mais c'est à travers l'entourage de Zaza que j'ai découvert combien la bourgeoisie était haïssable. De toute façon, je me serais retournée contre elle ; mais je n'en aurais pas éprouvé dans mon cœur et payé de mes larmes le faux spiritualisme, le conformisme étouffant, l'arrogance, la tyrannie oppressive. L'assassinat de Zaza par son milieu a été pour moi une expérience bouleversante et inoubliable.¹⁵⁾

初期の中編集『青春の挫折』の序文でも述べている、この「精神主義の大きな犯罪」の小説化を、ポーヴォワールは、1930年代のマルセイユ、ルーアンでの教職のかたわら何度も試みた。最終的には、ザザの母親への執着がこの悲劇を読み解く鍵の一つであると気づき、中編小説『アンヌ』で事実非常に近い構成で親友ザザについて語っている。中編小説『アンヌ』の中の作中人物ヴィニョン夫人はラコワン夫人をモデルとしており、作者はこの人物を、サルトルが『存在と無』のなかで展開した概念である「自己欺瞞」と結びつけて描き出している。そして、最終的に回想録の第1巻『娘時代』にその事実の全体を語ることを選択する。キリスト教的な両親への服従という観点からだけでなく、その巧みな教育方法で9人の子供を育て、娘に大きな影響力をもつラコワン夫人の重要さは作品ごとに増している。とりわけ『娘時代』の中で、娘の幸福を犠牲にして、ブルジョワ的慣習を優先させるマビユ夫人の描写には、語り手の厳しい非難がこめられており、ブルジョワ的価値観への嫌悪が明白である。

さて、『娘時代』の中でマビユ家の9人の子供達のうち、ザザをのぞいては唯一長女のマリー＝テレーズ・ラコワンだけが、作中でリリ・マビユという名前を与えられ、作中人物として描き出されている。母親に強制され、この作中人物は家族がすすめる青年との婚約を受け入れ、自分の階級の慣習に従うという役割を果たしている。

まず、初期の中編小説『アンヌ』の中で、ヴィニヨン夫人と長女リュセットの会話を通して描かれているこのブルジョワ的婚約について言及したい。

«En somme il n'a pas de situation, ce jeune homme», dit-elle brusquement. Mme Vignon toucha le lourd fermoir d'or qui retenait autour de son cou un ruban de velours noir.

«Les premiers temps, ton père vous aiderait», dit-elle d'un ton conciliant. Sur sa combinaison de soie, la combinaison des grands jours, Lucette enfila sa robe bleue. «Pour un parti brillant, ce n'est pas un parti brillant», sa voix était pleine de rancune.

Mme Vignon examina sans amitié le visage morose de sa fille aînée. «Si tu comprenais un peu mieux ce que doit être le mariage pour une chrétienne, tu ne ferais pas intervenir des questions de vanité», elle haussa les épaules. «Crois bien que si je n'avais pensé qu'à mon plaisir, tu ne serais pas de ce monde», ajouta-t-elle brutalement.¹⁶⁾

このように「これがおまえの最後のチャンスですよ」とヴィニヨン夫人は気のすすまない長女を見合いにせきたて、彼女は母親の意志に逆らうことができない。キリスト教的偽善でもって二人の娘を手中におさめるヴィニヨン夫人を強調しながら、ポーヴォワールは登場人物リュセットをむしろ犠牲者として描いている。

ところが、『娘時代』においては、長女リリ・マビユの役割は少し違ったものになっている。すなわち、語り手は自らの階級に順応しているこの人物に対してまったく同情しておらず、語り手はリリをザザのライバル(アンチテーゼ)として描いている。

L'aînée, Lili, tenait de M. Mabile, méthodique, vétilleuse, catégorique comme lui, elle brillait en mathématiques : tous deux s'entendaient à merveille. Zaza n'aimait pas cette grande sœur positive et prêcheuse.¹⁷⁾

この二人の姉妹のライバル意識の他に、語り手はリリの階級との調和を強調する。「完璧に階級に適応したこの模範生は何に対しても答をもっていた」と断言し、語り手は女性の参政権や神の存在についての議論の際のリリの反動的な意見を記録している。

とりわけ、リリの婚約は『娘時代』の中で完全に否定的なものとして描かれている。前述した中編小説『アンヌ』の中のヴィニヨン夫人と同様、マビユ夫人は長女

を結婚へとせかす。

Elle [Zaza] s'apitoyait cependant sur le sort de Lili : «C'est ta dernière chance», avait déclaré Mme Mabile. Lili avait couru consulter toutes ses amies. «Accepte», avaient conseillé les jeunes mariées résignées et les célibataires en mal d'époux.¹⁸⁾

マビユ夫人のザザに向けた次のような言葉、「この青年に不満がないのならどうして結婚するのを拒むのです。お前の姉は自分より頭の悪い青年とうまくやっているじゃありませんか」¹⁹⁾を通して、語りはこの結婚のブルジョワ的性質を強調し、この階級特有の価値観を明らかにしている。

さらに、作者はザザがヒロインにあてた手紙の一部を引用し、この婚約をブルジョワ的愚かさの見本として描写している。

Lili et son mari sont ici en ce moment : je crois bien que depuis trois semaines il n'y a pas eu entre eux d'autre sujet de conversation que la question de leur appartement et du prix que leur installation leur coûtera. Ils sont très gentils, je ne leur reproche rien. Mais quel soulagement d'avoir à présent la certitude qu'il n'y aura rien de commun entre ma vie et la leur, de sentir que ne possédant rien extérieurement je suis mille fois plus riche qu'eux et qu'enfin, devant tous ces gens qui me sont plus étrangers que les cailloux de la route, par certains côtés du moins, je ne serai plus jamais seule !²⁰⁾

このように、姉と同じ運命にさらされて、ザザはキリスト教信者としての母への服従と反抗との間で引き裂かれるのである。

ところで、実際には姉の結婚に対するザザ、すなわちエリザベート・ラコワンの意見は、『娘時代』の中で描かれているよりももう少し曖昧なものであったと指摘せねばならない。ジュヌヴィエーヴ・ド・ブレヴィル²¹⁾と友人ハンス・ミラーにあてた手紙の中では、エリザベート・ラコワンは婚約した姉の幸福そうな様子を喜んで報告しており、カルネの中でも姉の様子を非常にポジティブに書き留めている。

Mercredi 10 avril 1929

Le soir, nous avons toutes ensemble préparé des sandwichs à la salade ; nous étions toutes réunies une dernière fois avant le commencement d'effritement

que représente le mariage de Zon ; j'étais heureuse de penser que depuis trois mois je l'ai aimée, comme au fond elle mérite de l'être et que nous ne nous sommes pas une fois disputées.²²⁾

Lundi 20 mai 1929

Zon est charmante en ce moment, le bonheur l'embellit autant physiquement que moralement.²³⁾

このように、エリザベート・ラコワンはカルネの中でかなり穏当な感想を綴っており、彼女の姉の結婚に対する本当の意見を知るのは困難であると言える。ところが、『娘時代』の語りでは、リリ・マビユという登場人物をめぐってあらゆる曖昧さが省略され、彼女の性格と婚約は単純化され、反動的な性格と両親の意向にそった理性的な結婚という側面が強調されている。アラゴンの小説『お屋敷街』の中で、兄のエドモンがパリ社交界を目指すのに対し、弟のアルマンが自動車工場の労働者となり、二人の兄弟が正反対の道を歩むように、『娘時代』のなかの二人の姉妹も両極に位置している。すなわち、長女リリはネガティブな価値を体現し、次女のザザはポジティブな軌道に位置し、しかしながら結果的にはブルジョワジーの価値体系におしつぶされていく運命を背負う。スレイマンの用語でいうところの「価値論的選言」²⁴⁾が機能していると考えられる。つまり、語りは読者を曖昧さのない二元論的な価値体系へと誘導しており、ブルジョワ的慣習であるリリの結婚を読者に断罪させ、アンティテティックなりりの存在によって、ザザの最終部の悲劇をプログラムしていると言えるであろう。

結論

ラコワン氏（作中でのマビユ氏）は『娘時代』を読んだ感想として、娘の一人に「他者を裁くのはなんと難しく、慎重を欠くことであろう」²⁵⁾と書き送っている。また、ボーヴォワールの母親であるフランソワーズ・ド・ボーヴォワールも「親は子供を理解できないというけれど、お互いさまだねえ」²⁶⁾と感想を述べている。『伝記』の著者である、ダニエル・マドレナが指摘しているように、個人を客観的に知ることには限界があり、一人の個人を外側から一貫性をもって説明し、描くためには、作者は事実の不連続性を自らの想像力と解釈によって埋めなくてはならない。時にその人物は単純化され変形を被る以上、回想録の中に描かれた実在する人々がその記述に驚かされるのは当然であるかもしれない。想像力と解釈によって他者の一貫した人物像を作る際に、まさしく創造の余地が発生していると言えるのではな

いだろうか。

本稿でピエール・クレローとリリ・マビユの具体的な例を通して、書かれたものと現実との間の距離、すなわち自伝の中の創作行為を見てきた。『娘時代』のフィナーレ、すなわち「ヒロインによって勝ち取られる自由」へと向かう小説的統一性のために、幾人かの登場人物は機能的となり、単純化され、物語の展開に有用な演出が加えられる。これは二つの重要な出来事である「サルトルとの出会い」と「ザザの死」を、それぞれ「長い孤独の末の自由の獲得」および「ブルジョワ階級の犯した罪の断罪」として作者自身に納得のいく形で描き出したからに他ならない。したがって、これらの機能的な副次的作中人物は自伝の語りの中の必然的な産物と言えるであろう。

ボーヴォワールは1966年の日本での講演で、「自伝を書くとは過去の出来事を思い出の形のもとに再創造することに他ならない」²⁷⁾と述べている。この一連の回想録の中に読み取れる、サルトル・ボーヴォワールのカップルやその周囲の人々のイメージは、遠慮や外交的な要素が作用した結果であると同時に、文学的創造行為が深くかかわっていると結論づけることができる。

註

- 1) Simone de BEAUVOIR, *La Force de l'âge*, Gallimard, 1954, Folio, p. 13.
- 2) Simone de BEAUVOIR, *La Force des choses I*, Gallimard, 1963, Folio, p. 10.
- 3) Françoise RETIF, *Simone de Beauvoir l'autre en miroir*, L'Harmattan, 1998, p. 132.
- 4) Claude FRANCIS, Fernande GONTIER, *Les Ecrits de Simone de Beauvoir*, Gallimard, 1979, p. 218.
- 5) Simone de BEAUVOIR, *Tout compte fait*, Gallimard, 1972, Folio, pp. 27-28.
- 6) Simone de BEAUVOIR, *Mémoires d'une jeune fille rangée*, Gallimard, 1958, Folio, p. 381.
- 7) *Ibid.*, p. 408.
- 8) *Ibid.*, pp. 436-437.
- 9) *Ibid.*, p. 432.
- 10) *Ibid.*, pp. 459-460.
- 11) Maurice de GANDILLAC, *Le Siècle traversé*, Albin Michel, 1998, p. 128.
- 12) Eliane LECARME-TABONE, *Mémoires d'une jeune fille rangée de Simone de Beauvoir*, Gallimard, coll. Foliothèque, 2000, p. 95.

- 13) Annie COHEN-SOLAL, *Sartre*, Gallimard, 1985, Folio, pp. 151-152.
- 14) Maurice de GANDILLAC, *op. cit.*, p. 366.
- 15) Simone de BEAUVOIR, *Tout compte fait*, *op. cit.*, p. 22.
- 16) Simone de BEAUVOIR, *Quand prime le spirituel*, Gallimard, 1979, p. 139.
- 17) Simone de BEAUVOIR, *Mémoires d'une jeune fille rangée*, *op. cit.*, p. 160.
- 18) *Ibid.*, p. 425.
- 19) *Ibid.*, p. 465.
- 20) *Ibid.*, p. 493.
- 21) 『娘時代』の中ではジュヌヴィエーヴ・ド・ヌーヴィル。
- 22) Elisabeth LACOIN, *Zaza Correspondance et carnets d'Elisabeth Lacoïn 1914-1929*, Seuil, 1991, p. 251.
- 23) *Ibid.*, p. 267.
- 24) «la disjonction axiologique», Susan Rubin SULEIMAN, *Roman à thèse*, PUF, 1983, p. 74.
- 25) Eliane LECARME-TABONE, *op. cit.*, p. 229.
- 26) Simone de BEAUVOIR, *Une mort très douce*, Gallimard, 1964, Folio, p. 97.
- 27) Claude FRANCIS, Fernande GONTIER, *op. cit.*, p. 451.